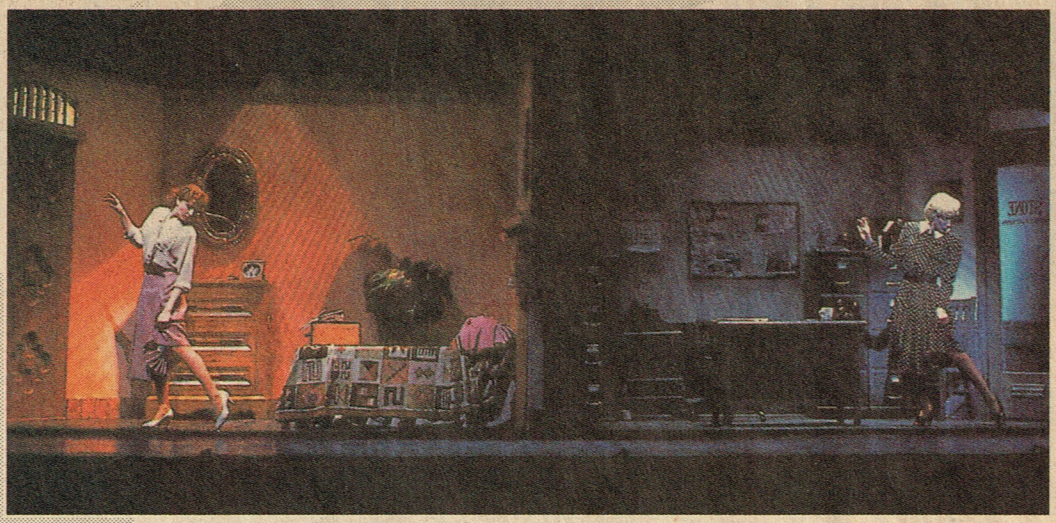
久々に〝自前〟のヒット作

「創造する力」まだまだ優位

一方、トニー賞を五部門で受賞した「グランド・ホテル」は、一九二〇年代末、ベルリンのホテルを舞台にしたミュージカル。ヴィッキ・バウムの小説が原作で、グレタ・ガルボ主演の映画が有名だ。ホテルに滞在する人々の多様な人生模様をダンスを通じてみごとに表現している。



「シティ・オブ・エンジェルス」の舞台から。現実は天然色、虚構の世界はモノクロで描かれる（©Bill Evans）

演出・振り付けは、「マイ・ワン・アンド・オンリー」のトミー・チューン。「コーラス・ライン」のマイケル・ベネット亡き後、ブロードウェイで最も期待のかかる才能である。

また、トニー賞のベスト・リバイバル賞を取った「ジプシー」では、テレビで人気の芸達者な女優タイン・デイリーが主演女優賞を獲得した。ジプシー・ローズ母子を描き、一九五九年にエセル・マーマン主演で初演された作品。新作ばかりでなく、リバイバル可能な過去の名作がふんだんにあるのもブロードウェイの強みだろう。

「ロンドン・ミュージカルが強いといっても、あちらではロイド・ウェバーやトレバー・ナン、ティム・ライスなどミュージカルを製作できる能力を持った人はごく限られている。その点、創造する力は全体的にはブロードウェイの方が上だと思う」。ニューヨークに十七の劇場を持つアメリカ最大の興行会社シューバート・オーガニゼーションのハロルド・ショーンフェルト会長は言う。

だが、その会長にとってもコスト高は悩みの種。「人件費は毎年五％上がってます。ここには十四の組合があり、十九世紀につくられた就業規則が今も生きている。演奏者の数なども細かく決められていて、時には全く必要のない人の賃金も払うわけです」と大変そうだ。

進出盛んジャパン・マネー
企業イメージの向上狙う

シューバート・オーガニゼーションのショーンフェルト会長

なんとかこうした傾向を打破しようと、この六月末、シューバートをはじめとする三つの主要興行会社と組合は、低予算の演劇やコメディーを製作していく共同プロジェクトを進めることで合意した。この計画にはミュージカルは含まれていないが、経営難の三劇場で人件費などを最低でも平均の二五％カットし、入場料も下げるという内容だ。「経済的な困難がギリギリまで進めば皆の協調を生むといういい例です」と同会長。

コストの高いブロードウェイを逃げ出し、郊外の劇場で低予算のミュージカルをつくろうとした「ニュー・ミュージカルズ」という話題のプロジェクトもあった。が、五月から六月にかけて上演された「蜘蛛女のキス」（ハロルド・プリンス演出）を上演したものの観客動員はかんばしくなく、今後の見通しはたっていない。

こうした中で見逃せないのがジャパン・マネーの影響だ。サントリーはシューバート・オーガニゼーションと提携、「ジェローム・ロビンス・ブロードウェイ」「シティ・オブ・エンジェルス」と二年連続してトニー賞ミュージカルに出資。TBSは「ジプシー」の製作費の三分の一を出した。角川書店は昨年秋開幕の「三文オペラ」に出資して失敗したものの、次のシーズンの「ショーグン」でブロードウェイに再挑戦する。

「グランド・ホテル」を上演するマーチン・ベック劇場は開幕前からにぎわう

サントリー・インターナショナルの岸本健二副社長は「ミュージカルの新作に参画したいと申し出たとき、シューバート側は別に出資者には困っていないという態度だった。ねばり強い話し合いの結果、イコールパートナーになれたのです」と言う。ミュージカルへの投資はビジネスとしてはリスクが大きいが、出資者の名はプログラム等に告示されるし、企業の文化イメージを上げるのには好都合との判断もあり、熱心なラブコールが生まれたようだ。

サントリーはシューバート社の製作した作品には必ずパートナーとして出資する方式で、その額は年に約二百万ドルという。今のところ作品の内容には全く口を差しはさまずカネを出すだけだが、ブロードウェイにおけるジャパン・マネーが見逃せない存在になりつつあるのは確かだ。

今週の
★★★

≪CD≫
「ブルー・ヴォイス」宮本文昭

タバコのCM
エ奏者初のベス
佐藤允彦、前田
よるサティ「ジ
ラフマニノフ「
などのクラシッ
既発のアルバム
の新録音を加え
ー「ボヘミアン
ルロス・ジョビ
娘」。
ジャズやフュ
曲を通して、艶
のあるオーボエ
る。ジャケット
真とアイヒェン
物憂いブルー